

高梁の文化財⑦

史跡 笠神の文字岩 かさ がみ

名碑を紹介した大本琢寿 おおもと たくじゅ

「たぎ川に幾百とせか経にけらし

徳治の文字の残る石ふみ」

これは、寛政九年（一七九二）に幕府代官の早川八郎左衛門が領内巡見の途次、成羽川の流れが洗う高さ六尺、幅八尺もの大岩に刻まれた碑を目にして詠んだ歌です。長年激流にさらされ、この頃には記された文意も読み



水没前の文字岩（矢印）周辺

それから九年後のことでした。折からの干ばつで干上がった川床を枕に夜を明かし、二日ばかりで文字の解説に取り組んだといいます。そうしてこの石碑が、奈良西大寺とその末寺であった成羽善養寺が中心となつて成羽川の船路を開削したことを記す、わが国最古の水運開発記念碑であり、その作業にあつたのが臈帯寺の六面石幢や板碑を製作した伊行経（井野行恒）であつたことを明らかにしたのです。こうした

取れなくなつていたようですが、徳治二年（一三〇七）から五百年を経た今も残る石碑に感動し、この歌を傍らの石に刻み付けました。笠神の文字岩と呼ばれていたこの石碑を解読し、その価値を世に知らしめた人がいます。大本琢寿（一八八五〜一九七二）、広島県安那郡下加茂村（現・福山市）に生まれた彼は、松江高等学校（現・島根大学）、第六高等学校（現・岡山大学）等でドイツ語教師を務めた後、縁あつて有漢町臈帯寺の住職となります。昭和五年、彼は成羽川の上流に古い石碑があることを知り興味を持ちました。それは臈帯寺にある六面石幢や板碑（前号参照）と同じ頃に刻まれたものだったからです。しかし、交通事情の悪い当時にあつては容易に現地を訪れることはできず、彼が念願を果たしたのは



整備された文字岩公園

研究の成果をもつて当時の平川村長を動かして、昭和一六年に国による史跡指定を実現させました。彼はその後も岡山市恩徳寺瓦経の発見、倉敷市総願寺宝塔銘の解説、高梁市秋庭氏五輪塔の研究など、文化財の調査・顕彰に大きな足跡を残し、八七才を一期として世を去りました。

昭和四三年、新成羽川ダムの完成によつて笠神の文字岩は水底に沈み、現在はそのほとりに碑文をかたどつた模型が置かれています。臈帯寺の墓地に眠る彼は、どのような思いでこの景色を眺めているのでしょうか。

（文・社会教育課文化係長 亀山行雄、執筆協力・高見周夫さん、大本一学さん）

編集と発行（毎月15日発行）高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。



古紙パルプ配合率100%再生紙を使用しています。